

“人工物と人間の融合”

2012年夏、イギリス・ロンドンでパラリンピックが開催され、障害者スポーツに注目が集まった。慶應義塾大学総合政策学部教授・山中俊治氏は障害をもつアスリートの義足をデザインしている。斬新なアイデアで新たな可能性を模索する彼の目には今一体何が映っているのだろうか。

日本における障害者スポーツに対する注目度の問題として、山中先生は障害者とそれを取り巻く人々の中の「心の問題」を挙げた。日本における下肢切断者は約6万人で、決して少ない数字ではないにもかかわらず、私たちが実際に義足使用者を見かける機会はほとんどない。その背景には障害者への同情が引き起こす心のギャップの問題が存在する。義足使用者は初めどうしても自分の脚が義足であることを受け入れられないと言う。しかし、彼らは徐々にこれが自分の体なのだとして自然に振る舞えるようになる。ところがそのような人に対しても周囲は同情の目を向ける。山中先生の義足の発表会では、義足を装着していた切断者モデルに対し、自身も障害をもった車いすの女性が「あらー、大丈夫？痛くないの？」と声をかけた。それは優しさから出る言葉に違いないが、現実を前向きに受け止めている切断者にとってはかけて欲しくない言葉なのである。「眼鏡や靴を褒めるように自然に義足の話ができない。」と山中先生は言う。

義足デザインを手がける慶應大学の山中教授

そのような状況の中で、義足デザインの新しい可能性に山中先生は期待する。「人工物がデザイナーの手によってこの上なく美しいものになることの力みたいなのは信じている部分があって、それがこの人工物（義足）にも与えることができれば、なんか人体がすごく輝いて見えるんじゃないだろうかっていう想像はできたんだよね。」義足がデザインされているというだけで、注目度は高まる。認知度が高まることによって、義足に対する過剰な反応が減ると考えられる。さらに見た目がより洗礼されることによって、義足は障害者を支える痛々しい人工物から、風格をも漂わせる芸術品となる。ロンドンパラリンピック（競技名）に出場した慶應義塾大学・高桑早生選手の練習中、誰もが義足の話目を避けていた。しかし、山中先生のデザインした義足を着用して練習を行った際には、「それかっこいいね。」「前から思ってたんだけど、義足で走ってどんな感じなの？」という会話が聞こえるようになったという。義足のデザインは周りの見方を大きく変え、周囲の人間が自然と作り出している心の壁を壊す可能性を秘めている。

「人の心の問題がデザインによって解決される領域がもっと増えればと思う。そのためkick starterに自分になりたい。」